

「感謝の心」ラウンジ、内外教育、時事通信社 2011年6月7日刊を読む

感謝の心

1. 東日本大震災が起こってから 5 日目。天皇陛下の「諸外国から救援のために来日した人々、国内のさまざまな救援組織に属する人々が、余震の続く危険な状況の中で、日夜救援活動を進めている努力に感謝し、その労を深くねぎらいたいと思います」という言葉に、新鮮な感動を覚えた。
2. それは、通信が途絶えた被災地の状況を少しでも知りたい、と見ていたテレビが、避難所で「食料が、水が、灯油が足りない」と叫ぶ、放送記者の不満の声であふれていたからである。生存率が急激に低下するとされる時間が迫る中で決死の救出作業が続けられていたころ、スタジオで「自衛隊はなぜ避難所に浴場を準備しないのか」と不平を述べたコメンテーターもあった。
3. 不平不満は正義である。しかし、電話が通じるようになったのは自然に復旧したからではないし、不十分ながら物資が届くようになったのは昼夜兼行で道路や鉄道、空港や港湾などの復旧に当たった人々の尽力のたまものである。国内だけではなく、遠い国から駆け付けてくれた救助隊も多い。危険を伴うのでその活動の取材は難しいとしても、それについての報道や感謝の言葉は、不平不満に比べてあまりに少なかった。
4. 消防隊員が福島第 1 原子力発電所への注水作業を拒否すれば処分する、と担当大臣が発言したという報道があった。命令した形にすることで自分が責任を負う、というのが真意だと解釈する。しかしそれでも、当事者を満足させ、無事を祈って帰りを待っている家族を慰め、後に続く者の士気を鼓舞するという点では、任務を終えて帰庁した隊員への感謝の言葉が続かなかったという、都知事の涙には及ばないだろう。
5. 給食費を払っているのだから「いただきます」を言わせるな、と要求する保護者があるという。確かに、農家の米が売れるのも厨房ちゅうぼうで働く人たちが給料を得られるのも、自分が給食費を払い、子供が食べてやっているからだ、という理屈も成り立つ。「情けは人のためならず」という言葉が、逆の意味に解釈されるような時代である。
6. それでもやはり、人間は利害や損得勘定だけで生きているのではない。給料のためだから当然だとされるより、感謝やねぎらいの言葉に満足し奮い立つ。それが今も変わらぬ心情ではないか。

7 . 教育は、感謝の心を大切にし、十分に育ててきただろうか。ともすれば、要求や自己主張を過度に優先し過ぎはしなかっただろうか。未曾有の災害の中で、改めて考えさせられたのである。

P20

[コメント]

東日本大震災を契機に、ものごとの本質とは何かが少しずつわかっていくことが多い。この「感謝の心」は大切なことを指摘してくれた有難い文だと思う。水杯の別れをして自衛隊員、消防士、警察官、技術者、さまざまな支援の方々を被災地へ送り出す家族の立場に立っても、ものごとは考えたい。社会は皆で支え合う。このことの大切さを、相手の立場で考える想像力を持つことは人間としての能力だと思う。

- 2011年6月7日林 明夫記 -